

◎特集 『明治が歴史になったとき』を読む◎

『明治が歴史になったとき』の意図と達成…特集の序文として

佐藤雄基

本特集は、二〇二一年六月五日（土）にZOOMを利用してオンライン開催した『明治が歴史になったとき』史学史としての大久保利謙（勉誠出版、二〇二〇年）合評会をもとにしたものである。本書の編者である佐藤雄基が『明治が歴史になったとき』の意図と達成」と題して趣旨説明をおこなったのち、本特集にご寄稿いただく三名の評者に報告をお願いした。近代政治史、大学史・大学アーカイブズ、華族研究、それぞれの視点から充実したご報告をいただき、執筆者も含めて六七名の参加者にお集まりいただき、質疑も大変盛り上がった。今後の議論の進展のためにも、記録として残す必要を感じ、三名の評者と本誌編集長に相談したところ、ご快諾いただき、こうして特集として掲載することになった。

一 本書の意図

『明治が歴史になったとき』は、二〇一七年一二月九日に開催された公開シンポジウム「大久保利謙と日本近代史研究 家族・学問・教育」（於立教大学池袋キャンパス）（企画者は小澤実氏）をもとにした論集である。詳細は本書の序文をみていただきたいが、本書は小澤氏と相談をしながらタイトルを変更し、史学史と史料論を主要テーマにした構成となった¹。

本書の意図は大学・教員・アーカイブズに即して史学史を考えることにあつた。立教大学の元教員である大久保を研究対象としたことは、元教員の「顕彰」を目的としたものではなく、史学史研究者が勤務先という「地の利」を活かして研究素材を見つけたということに過ぎない。大学史

『明治が歴史になったとき』の意図と達成(佐藤)

において元教員の学術研究を取りあげるとき、多くの分野において無数の教員がいるなかで、どのような基準で誰を選択するのは極めて難しい問題である。だが、編者たちには史学史という立脚点があり、立教大学図書館に「大久保利謙文庫」があった。むしろ立教大学と「文庫」に即して本書を刊行したところから、大学史・大学アーカイブズ・自校史教育と学問史との関係があらたな論点として浮上した。大学史・大学アーカイブズの観点から立教学院展示館の豊田雅幸氏に報告をお願いした理由である。

立教大学の教員による元教員の「顕彰」ではないという前言とは矛盾するようであるが、立教という場に即して、新しく日本近代史の教育・研究を開始した大久保の存在を、とりわけ立教の同僚・学生たちに広く知ってもらいたいという個人的な動機が編者にあったことは否定できない。編者が大久保研究を着想したきっかけは、歴史家のアーカイブズとして立教大学図書館のもつ「大久保利謙文庫」を調査したことにある。残念ながら、立教の教員・学生の間でも「文庫」の存在はほとんど知られていない。大久保に限った話ではなく、元教員の文庫をはじめとする学術資源は、その価値が理解されにくい。限られたリソースやスペースのもとで、新たな資料保存や学術資源の構築をおこなうことが難しくなっている現状も重なり、既存の資料の保

全でさえも必ずしも保証されるものではない。本書の拙稿でも論じているが、研究者にできることとして、自らの研究を通して、学術資源の価値とそれを保存することの必要性を専門家以外の人びとに広く認めてもらい、資料保存のコンセンサスの形成に関与していくことが大事ではなからうか。これは「大久保利謙文庫」に限った話ではなく、日本社会における文化財・資料保存に歴史学がどのように関わっていくのかという問題の一端であると考えている。

本書の主題とする史学史については、そのイメージが必ずしも一定していないかもしれない。その時代の代表的な歴史書、研究の潮流を読み解き、あるいは歴史家の伝記的な研究をイメージする人もいるだろう。何か歴史家の専門家集団の内向きの営みのようなイメージを抱く人もいるかもしれない。だが、広く社会のなかで歴史学の位置を考え、必ずしも専門的な歴史研究者ではない人びとによる歴史叙述との関係を捉え、あるいは編纂事業や史料調査、教育制度をはじめとして、歴史叙述を成り立たせている様々な仕組みに着目した新たな史学史研究が生まれている。本書はそうした研究動向をうけ、立教という場と大久保という人に即して、現在に近い時代がどのようにして歴史研究・教育の対象となるのか、そのときどのようなことが問題となるのか、歴史研究の基礎となる「史料」はどのようにして

整備されて利用可能になるのか、という問題を考えようとした試みである。

二 本書の達成

本書の達成点について編者自ら述べるのは難しいが、現時点で考えることを述べると、以下三点にまとめられる。

第一に、史料論を軸にして史学史の方法論を考えたことになる。史料となる素材は歴史家の研究テーマに応じて多様であるということがしばしば言われるが、現実問題として、史料として利用可能になっていなければ研究は難しい。歴史研究の材料となる史料は、ありのままに残りつづけてきた訳では決してなく、様々な人びとの営みの上に、今に伝わり、研究資源として利用可能になっている。近い時代が歴史研究・教育の対象となるとき、同時代に近い時代の資料が「史料になる」過程を史学史研究の論点とした点は、問題提起としては一定の意味をもつように思われる。また、これにかかわって、歴史家の蔵書を含む個人史料や自伝の成り立ちを対象とした（本書の拙稿や今井修氏論考）。

これにかかわって、シンポジウム当日の質疑の場で、本書の執筆者の一人である箱石大氏が「史学史によって史料論を深めたい」と発言をしたが、大変重要な発言であると

思われる。前近代の史料のほとんどが、「これを残したい」という人びとの意図と様々な偶然とが組み合わさりながら、現在に伝わってきた。個々の史料の性格を考え、今に残る史料から過去がどこまで、どのように見えてくるのか、その「射程」を見極めるためにも、史学史に基づく史料論は必須だろう³。史学史と史料論は、歴史学にとって車輪の両輪のような存在である。しばしば「史料に基づいて実証する」という語りがなされるが、史学史と史料論は、「実証」を成り立たせる基盤そのものを明らかにし、「実証とは何か」を問いなすものでもある⁴。

第二には、専門的な歴史研究を支える条件は何かを問い直していることである。史料として利用可能な環境整備だけではなく、周年事業、編纂事業などの諸契機、教育・研究機関の整備（大学史）、中等学校における歴史教育のありかた、などが関わってくる。編者がこうした問題に関心を抱いたのは、明治期の史料調査（採訪事業）と古文書学の成り立ちとの関係を考えてのがきっかけであるが、近代学問としての歴史学を成り立たせる様々な制度的な仕組みを捉え、その中で学問史を位置づけなおす必要を感じており、本書もその試みの一環である。

第三には、人びとが歴史について何かを書く（あるいは語る）というヒストリオグラフィーの広がりのおかげで、狭

『明治が歴史になったとき』の意図と達成（佐藤）

義の?) 歴史学の位置は何かという問題について、大久保利謙という個人を焦点にあてて考えたところにある。前述したような歴史研究を支える諸制度・諸条件が、どのようになっているか、運用されていくのか、個人の視点的にわばミクロヒストリアの視点から考えたのである。第一部の諸論考はまさにその問題に焦点を当てており、第二部・第三部で大久保の父利武を取りあげたのも、専門的・職業的な歴史学とその外部に広がる必ずしも専門家によらない歴史叙述との関係を考える素材になると思われる。「歴史」はアカデミックな歴史家の専有物ではなく、専門的な歴史家が歴史の専門家としての地位をしめるためには相当な努力が必要であった。そうした努力に対する社会の側の反応・反発もあり、専門的な歴史家と専門家以外の人びとの相互作用を通して、「歴史を書く」ことをめぐる歴史がダイナミックに動いていく。現代歴史学では人びとの歴史実践やパブリックヒストリーへの関心が高まりをみせているが、こうした問題系を史学史のなかで位置づけようという試みでもある（本特集寺尾論文）。

こうした達成点を踏まえ、今回のシンポジウムでは特に最後の論点を重視し、本書の提示した論点をさらに検討していただくために、前述のように大学史・大学アーカイブズの観点から豊田雅幸氏に、大久保家と深い関係のあった

島津家の修史事業の側から寺尾美保氏に、政治史研究の観点から前田亮介氏に報告をお願いした。奇しくも三論文ともに史料と歴史実践をめぐる相互に関わりをもちながら重要な論点が提示されているように思われる。以下、本書の達成点とは異なるが、簡単に感想を述べたい。

前田亮介氏の論文「史学統一」の夢・戦前（一九二三—一九四五）の大久保利謙」では、歴史家としての大久保の学問形成における大正「文化史」の文脈が丹念にほりおこされるとともに、戦時下の大久保が「非職業的歴史家も担い手とした、多元的な歴史叙述／歴史実践のありようの再現に向かい、史学史と地方史を通じて、無数の「明治文化」の担い手を再発見していくという展望が示されている。京都の「文化史」の影響とともに、東京の「文化史」のありよう、実証主義史学の系譜など、史学史上重要な問題提起が多く含まれている。

郷土史と史学史（歴史を書く）ことこの歴史」という大久保の軸は、寺尾美保氏の論文「史料と史料をめぐる人的ネットワーク・島津家と大久保家の関係から」が、大久保の父利武と島津家・鹿児島的事例を中心にして提示した論点とも共鳴している。アカデミズムの研究者にとどまらない人びとが、史料や研究に重要な役割をはたしていたことが強調されている。また、本書でも触れられているが、大

久保利武は「内政家」として尚古集成館にかかわり、社会教育の一環として博物館事業を考え、ローカルな人びとのもつ「歴史」にも深い関心を寄せていた。こうした発想は史学史上、必ずしも孤立したものではないように思われる。黒板勝美や平泉澄らも、郷土の英雄である尊皇の武士たちの顕彰事業にかかわり、地誌・歴史書などの歴史叙述に強い関心を寄せていた。また、第二次世界大戦後の国民的歴史学運動もまた「自分たちの歴史を書く」ことを提唱し、人びとの歴史実践に働きかけていた。郷土史と史学史は、多くのアクターが独自の構想をもって参入してくる「国史の主戦場」のような領域であったといえよう。そのなかで、戦時下の大久保利謙が「実証主義」の立場から独自の構想を模索していたという前田論文の指摘は、戦前・戦中・戦後を通して史学史を構想するとき、重要な意味をもつと思われる。

豊田雅幸氏の論文「大学アーカイブズと大学アカデミズム・教員個人・学術研究を扱う難しさ」では、大学における史料保存と歴史叙述にかかわる固有の難しさが説かれている。大学は社会的な責任をもちつつ、普遍的な学問世界につながる場であると同時に、個別の経営体であり、教職員・学生・卒業生など関係者にとってはローカリティをもつ場でもある。前田論文や寺尾論文をつなぐ大事な論点で

あるとともに、本書の出発点の一つである「大久保利謙文庫」をめぐる問題にかえってくるのだと思う。前述のように、「単なる顕彰にしたくない」が、資料保存のためにも大学メンバーに「広く知ってほしい」という必ずしも整合しない動機が本書の編者にはあった。豊田論文は自校史教育における元教員・卒業生の取りあげ方を論じ、どのような学生を育てたいのかという教育理念や学生のエンカレッジ教育の重要性を説いている。「顕彰」に収斂しない歴史教育の可能性を探ることは、ローカリティをもつ場において「自分たちの歴史を書く」（自国史も含まれる）うえで、の課題であるし、研究・資料保全とも不可分だろう。

三 本書の課題

最後に本書の課題を述べたい。むしろ今回の企画を通じて様々な問題点が浮き彫りになるのではないかと思われるが、現在のところ以下三点を考えている。

第一には、本書は大久保利謙の事例研究に過ぎず、他大学の事例もみていく必要がある。別の企画において一九四五年以前の日本の大学史学科の歴史について調査しているが、戦後の新制大学において近代史の研究・教育がどのようなようになっていくのかに関する調査には及んでいな

『明治が歴史になったとき』の意図と達成(佐藤)

い。本書の箱石論文においても、國學院大學における藤井貞文の存在に触れられているが、たとえば法政大学では藤井甚太郎が一九四九年に着任し、日本近代史講座を開始している。あらためて戦後日本の「史学科の比較史」を構想する必要を感じている。

第二には、大久保利謙研究に関していえば、今井修氏が指摘するように詳細な年表・著作目録を作り直す必要がある。これらを作成して本書に所収できなかったことはひとえに編者の怠慢であり、あらためて今後の課題としたい。

前田論文では大久保に関わる新資料が多数紹介されており、史学史研究における基礎的な史料調査・研究がなお多くの課題と可能性をもつことを示している。豊田論文では、大久保の私蔵資料が、立教以外にも広く分散しており、資料群としてのまとまりを失ってしまっていることが指摘されている。元教員・学生に関わる資料にどのようなものがあるのか、所蔵情報も含めてレファレンス機能の整備が大学アーカイブズの課題かもしれない(そのためには予算と人員の拡充が必要だが)。

第三には、本書は戦前および戦後すぐの一九五〇・六〇年代の時期が中心で、現在にいたるまでの分析が不足している。また、いわゆる戦後歴史学との関係において大久保の近代史研究がどのように位置づけられるのか、本書の松

沢裕作論文が重要な問題提起をしているものの、それを踏まえて、あらためて考える必要がある。この点に関して、シンポジウムでは前田亮介氏に報告をお願いし、あらためて大久保以後の政治史研究の文脈の中での再検討をしていただいたが、報告のなかで大久保の仕事が現在省みられることが少ないということが指摘されていた。教育史研究においても教育学部系の教育史が戦後発展する一方で、大久保の仕事は省みられない傾向が生まれていることが指摘されている。

大久保が現在忘れられつつある歴史家となっている理由を考えると、大久保の仕事の特徴に理由の一端があるように思われる。すなわち、大久保の仕事は、専門的な歴史研究の出発点にある史料の整備といった基本作業であった(前田論文で指摘された大久保の言葉を借りれば「基礎工作」)。とりわけ大久保の仕事の範囲は広く、文学部史学科以外にも教育学部教育史、法学部政治史など、文学部史学科以外の様々な学部学科でなされている様々な歴史研究(〇〇史)にかかわっている。そうした「〇〇史」もまた、それぞれのディシプリンのなかの歴史研究であると同時に、史料に立脚しているからである。だが、個々の専門研究がいったん確立し、それぞれ独自に発展するにつれて、大久保のような「基礎工作」の仕事は忘れられていく傾向

があるのではないだろうか。

必ずしも文学部系の歴史学に収斂しない多様な「〇〇史」の広がりがある一方、現在ではこうした歴史研究の多様性は厳しい状況におかれつつある。多かれ少なかれ現在の危機的な状況を背景として、法学部の法制史、経済学部の経済史など「〇〇史」の学問史研究をふりかえる企画が近年増えているが、多様な「〇〇史」が相互に異なる関係にあったのかという点も学問史の大きなテーマとなるだろう。寺尾論文の指摘するような「史料と史料をめぐる人的ネットワーク」には、必ずしも専門家ではないアマチュアだけではなく、狭義の歴史学以外の多様な「〇〇史家」も加わっていた。その研究基盤を形成する草創期にあつて、多様な歴史研究が互いにかかる関係にあつたのか、現在では見失われしまった布置が、史料という観点から逆照射される。そのときには学問史上の大久保のよいうな存在にあらためて光があてられることもあるかもしれない。こうした多様な歴史研究の相互関係という論点は、本書では課題として残されたが、近代学問の歩みを振り返りかえりつつ、歴史系諸学問が今後どのように協同していくのか、新たな展望を切り開くためにも、深められなければならない論点であるにちがいない。

【付記】本研究はJSPS科研費19k02461の助成を受けたものです。

『明治が歴史になったとき』の意図と達成(佐藤)

註

(1) 参考として本書の目次を掲げておく。

序論

第一部「明治」が歴史になるとき」

松沢裕作「大久保利謙と戦後日本近代史研究の出發」

松田宏二郎「政治学者における「明治」の歴史化」

箱石大「明治政府による記録編纂 修史事業と近代文書」

第二部「大久保利謙の歴史学」

マーガレット・メール「大久保利謙と近代史学史研究」

小澤実「大久保利謙と立教大学史学科(一九五八〜七二)」

今井修『日本近代史学事始め』についての覚書：大久保史学の史学史的検討のために」

松田好史「小伝・大久保利武：大久保家三代の系譜」

第三部「大久保史学にみるアーカイブズ・蔵書論」

佐藤雄基「大久保利武・利謙父子の学問形成と蔵書：立教大学図書館所蔵「大久保利謙文庫」・学習院大学史料館所蔵「大久保文庫」の紹介をかねて」

華名ふみ「国立国会図書館憲政資料室と大久保利謙の構想」

大島明秀「大久保利謙と蘭学資料研究会・蘭学書」

小田部雄次「華族と歴史学：大久保利謙の華族研究と華族史料」

史部」

(2) 松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィ』(山川出版社、二〇一五年)。

(3) この問題は、近世の国学者がおこなったテキスト校訂や「考証」のあり方から考えなおす必要がある。本書刊行後になるが、大沼宜規「考証の世紀 十九世紀日本の国学考証派」(吉川弘文館、二〇二一年)。

(4) 成田龍一氏が近年「実証としての史学史」という動向が生

まれていることに注目し、本書をとりあげて「しかし、これとて、旧態依然とした史学史の作法ではなく、あらためて史学史に向き合う姿勢を検証していることに留意しておきたい。」と評している(『歴史論集1 方法としての史学史』

岩波書店、二〇二一年)。「実証」という概念の使用法については歴史研究者の間でも決して一定しておらず注意が必要であるが、史学史が「歴史家の自己防衛的な語り」になっ

てはいけないという成田氏の危機意識は受けとめたいと思

う。

(5) 拙稿「明治期の史料探訪と古文書学の成立」(松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィ』山川出版社、二〇一五年)。

(6) 小澤実氏との共編『史学科の比較史』(勉誠出版、二〇二二年刊行予定)。

(7) 上沼八郎「解説」(大久保利謙『日本の大学』玉川大学出版部、一九九七年、初発表一九四三年)三四一頁。

(8) 『法制史研究』七〇集(二〇二〇年)の特集「日本における法史研究の歴史」で、神野潔「明治期における日本法制史学の展開図」が法制史学における「史料」の重要性を説き、松

沢裕作「史学」成立の文脈からみた日本の法史研究の始まり」も「〇〇史」と史学科の歴史学との共通の土台を重視し

ている。

(9) 前掲注(8)の『法制史研究』のほか、たとえば、恒木健

太郎・左近幸村編『歴史学の縁取り方：フレームワークの史学史』(東京大学出版会、二〇二〇年)、『日本の教育史学』

六一巻(二〇一八年)の特集「シンポジウム：近代学問にお

ける歴史研究の意義——政治史、経済史、科学史、そして教

「育史」など。

(10) 前掲注(5) 拙稿は史料探訪に注目したのだが、様々な
〇〇史研究の交錯する場として、調査事業は学問史上重要
だと思われる。たとえば、戦後初期の農村調査では、農業
史家の古島敏雄が中心となり、歴史研究者を含む様々な専
門分野の研究者が参加し、学際的な場となった。

(本学文学部教授)